



自生的近代性の聖(聖)・俗(俗)持続機制としての再活性化

Revitalization as Mechanism of Sacred-Secular Continuity

目次

1

3

5

7

9

11

2

4 ハンサム・レイクとロングハウス運動

6 東学思想の自生的近代性

8 東学vs大巡思想比較

10 自生的近代性の意義

12 参考文献

研究の背景および目的

西欧近代性と非西欧近代性

- 近代性の様相は帝国と植民地により、伝統に対する態度の差異が鮮明に区分される
- 西欧近代性:伝統に対する反作用としてアイデンティティを規定、否定的立場を強調
- 非西欧近代性:西欧への反作用として伝統に肯定的立場を強調

自生的近代性と再活性化

- 非西欧社会では西欧の近代化を単純に模倣せぬ自生的近代性が発現 アイデンティティ
- 危機のなか、リミナリティを通じた内的革新と再活性化により伝統の再構成を追求
- 本研究は東学思想と大巡思想を通じて韓国の自生的近代性の特性と意味を明らかにしようとする

理論的背景リミナリティ理論と再活性化理論

ターナー(Turner)のリミナリティ理論

理論

- 社会的構造と秩序の境界(limen)にある転換的狀態
- 通過儀礼として既存秩序から分離、変化後に再統合される過程
- リミナリティは変化の機制として作動し、危機に対応する変化の中心
- コミュニタス(communitas):リミナリティ状態において形成される平等な共同体

ウォレス(Wallace)の再活性化理論

理論

- 文化的危機状況における持続機制としての伝統の再解釈
- メイズウェイ(Mazeway):社会構成員が持つ精神的イメージ、社会的有機体に適応する方式
- アイデンティティの危機に対する集団的対応としての伝統の再構成と継承
- 文化変化より伝統の連続性に焦点を置く理論

両理論の相互補完性:リミナリティは変化の過程を、再活性化は持続の過程を説明

ウォレスの再活性化理論概観

メイズウェイ(Mazeway)概念

定義

社会構成員が持つ精神的イメージ(mental image)で、個人が社会に適応していく方式

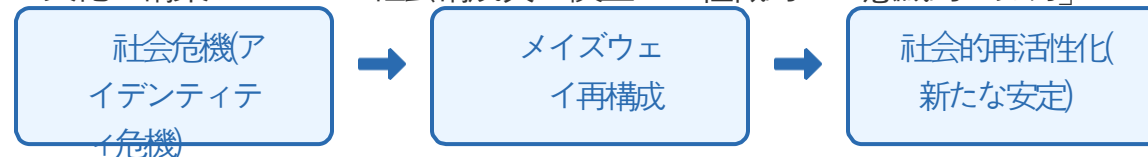
本来の意味:「迷路(maze)」-複雑な社会環境のなかで個人が道を見出す方式

- メイズウェイは社会的環境における物理的客体に対する認識とストレス最小化方式を含む社会危機時にはメイズウェイにも危機が発生し、これは物質的危機よりも大きな脅威として作用

社会有機体論と再活性化

- ウォラスは人間社会を巨大な有機体と見なし、危機時には社会が緊急措置を取る

再活性化とは「より満足のいく文化を構築するための社会構成員の慎重かつ組織的かつ意識的な努力」



再活性化理論は、リミナリティ理論が変化機制に焦点を当てるとすれば、持続機制に焦点を当てる ”

ハンサム・レイクとロングハウス運動

背景:アイデンティ

ティの危機

- 19世紀初め、米国北東部インディアン部族イロコイ族のセネカ族指導者
- 米国の植民政策による伝統的権威の喪失とアイデンティティ危機の経験
- 他のインディアン指導者たちと同様に酒と放縦の生活に陥ったが、神秘体験により人生が変化

再活性化の過程

- **神秘体験**
神霊的存在が現れ、インディアンの再活性化された未来を啓示し、節制された規律ある生活を要請
- **実践および伝播**
自らの経験と教えを直接実践し周囲の人々に伝播
- **ロングハウス運動の誕生**
ハンサム・レイクのいたロングハウスに集い、規律運動に同参する共同体を形成

北米インディアンの他の再活性化

運動

ゴースト・ダンス(Ghost Dance)

踊れば、インディアンのユートピアが速やかに到来するという啓示に従った儀礼的運動

ペヨーテ儀礼(Peyote Ritual)

「ペヨーテ」という薬草を摂取する儀礼を通じた霊的再活性化運動

意義:ウォラスの再活性化理論はハンサム・レイクの事例を研究して定立された → 数多くの再活性化運動の共通段階を発見する土台と

再活性化の5段階

ウォラス(Anthony F. C. Wallace)が提示した再活性化運動の五段階過程

1

正常状態(Steady State)

社会構成員がメイズウェイ(社会的認識体系)を通じて安定した生活を営む状態

2

個人的ストレスの期間(Period of Individual Stress)

外部的要因(植民支配、文化衝撃など)により個人がアイデンティティの混乱とストレスを経験する時期

3

文化的歪曲の時代(Period of Cultural Distortion)

伝統的信念体系が崩れ、外部文化との衝突により社会的混乱が発生する段階

4

活性化期間(Period of Revitalization)

既存の伝統を新たに解釈再構成する核心段階として、次の要素が現れる:

- ◆ メイズウェイ再構
- ◆ 成組織の形成
- ◆ 文化変形
- ◆ 意思疎通と伝播
- ◆ 文化的適応の日
- ◆ 常化

5

新たな安定状態(New Steady State)

東学思想の自生的近代性

東学の登場背景

- 朝鮮のアイデンティティ危機:長きにわたる宗法的秩序が日本と西欧の資本主義的物質文化に脅かされる
- 伝統の崩壊:数千年にわたり続いた伝統が西欧文明により迷信としてタブー視される
- 指導層の危機:尊敬されていた指導者たちが迷信を煽る詐欺師へと転落

「東学」名称の意味

- ① 東洋の認識方法 相關性
- ② 内部変化と成長の追求
- ③ 西学への対応 再解釈案

東学の自生的近代性と運動の方向

- リミナリティ的特性:内部的変化と成長の追求、正心修身(正心修身)の実践
- 再活性化の側面:儒仏仙の統合、伝統の創造的再解釈と専有
- 二重的対応:内聖(内聖)は反封建、外王(外王)は反外勢として対応
- 人間中心主義:人乃天(人乃天)思想を通じた人間価値の近代的再定立
- 自生的近代性:西欧模倣ではなく伝統の連続と変化により独自の近代性を追求

66 東学は、その名称からして西学という外部イデオロギーに対する対応様相が現れており、相關的思惟を通じた自生的近代性の典型的事例である。

大巡思想の自生的近代性

大巡思想の登場と意義

- 大巡真理会は東学関連団体のなかで東洋伝統の宗団名称と教理体系を維持し大宗団へと成長した唯一の団体
- 東学が提示した理想世界の実現にまで東学の範囲を拡大した大巡思想
- 「参東学」という名称により東学の完成を意味し、儒仏仙伝統の統合を志向

リミナリティと再活性化の観点

- リミナリティ様相において成し遂げた変化が持続する唯一のコミュニタスとしての意味
- 大巡思想は無極道から宗団へと発展し、リミナリティより再活性化が適合する段階へ進入
- 巡思想の「会(會)」はコミュニタスに対応し、パトリック・ロードはこれを東洋の近代性として解釈

東学と大巡思想の自生的近代性の相違点

東学が初期のアイデンティティ危機に対するリミナリティ的対応であったならば、大巡思想は東学の再活性化に失敗した地点で伝統を新たに解釈し持続させることにより、自生的近代性の完成された形態を提示する

東学vs大巡思想比較

リミナリティと再活性化の観点から見た東学思想と大巡思想の相違点と共通点

比較項目	東学思想	大巡思想
登場背景	「西学」への直接的対応、反封建・反外勢運動	東学のリミナリティを持続させる新たなコミュニティの形成
リミナリティ様相	内面的変化、成長中心の通過儀礼的特性の強調	宗団へと発展し再活性化中心へ転換
名称の意味	「東」:東洋的認識論の方法論的対応	「真東学」:東学の完成と本質的価値の回復
伝統に対する態度	儒仏仙伝統の統合的受容	東洋伝統宗団の名称と教理体系の継承発展
再活性化の特性	伝統の再解釈と社会変革的ユートピア志向	「回」という特性を通じた東洋的近代性の具現
核心的価値観	人乃天(人乃天)の人間中心主義	母自欺(母自欺)を通じた自己省察と創造的受容

相関的思惟と自生的近代性

相関的思惟の概念

相関的思惟(Correlative Thinking):東洋伝統の認識論の核心思惟方式であり、事物間の連関性と全体的脈絡を重視する思考体系

西洋の分析的思惟

- ◆ 対立的要素の弁証法的調和
- ◆ 二項対立による分析 原子論
- ◆ 的世界観

VS

東洋の相関的思惟

- ◆ 相補的要素の境界の調和
- ◆ 全体論的アプローチ
- ◆ 天・地・人合一の世界観

自生的近代性とポストヒューマニズム

- 西欧近代性がルネサンスを通じたギリシア・ローマ文化の再活性化として始まったように、東洋もまた自己の伝統の再解釈を通じて自生的
- 近代性を構築過去には相関的思惟が東洋近代性を停滞させた要因と目されたが、韓国新宗教はこれを自生的近代性の土台として活用
- ポストヒューマニズム時代の到来:人間と機械の結合が問題となる現代において、韓国新宗教の人間中心主義は新たな価値を提供
- し得る 東学と大巡思想の相関的思惟は認知宗教学領域において脱近代性を越え、ポストヒューマニズム時代の代案的哲学として

「東学思想と大巡思想のリミナリティと再活性化は、相関的思惟の創造的受容を通じた自生的近代性の具現である」

結論および意義

研究要約

- ✓ 東学思想と大巡思想に現れる自生的近代性が、相関的思惟リミナリティ・再活性化理論を通じて体系的に説明される
- ✓ 非西欧社会の独自の近代化経路として、伝統の再解釈と創造的受容の過程を確認

韓国新宗教の普遍的価値

- 💡 相関的思惟を土台とする人間中心主義は、ポストヒューマニズム時代の代案的思想として再照明可能
- 💡 無自欺(毋自欺)の自己省察と創造的受容は、現代社会のアイデンティティ危機解決に寄与

自生的近代性の成果

- ✓ 西欧模倣ではなく伝統の連続と変化を通じた独自の近代性の構築
- ✓ 大巡思想の「回」という特性が東洋的近代性のコミュニタスとして機能

今後の研究方

向

- ➔ 人工知能時代の人間中心主義と韓国新宗教思想の接点の研究
- ➔ 東アジア他国家の自生的近代性との比較研究が必要

「相関的思惟のリミナリティと再活性化は、西欧近代性の限界を越える
代案的近代性の可能性を提示する」